

郷土資料の作成と活用に関する研究

— 副読本「かわさき」を活用した授業研究を通して —

郷土資料研究会議

佐藤 俊司¹ 中川 通彦² 伊東 芳男³ 前島 和樹⁴

要 約

副読本「かわさき」(以下「副読本」と呼ぶ)は、昭和30年の発刊以来、数次の改訂を経てきた。平成5年度に現在の副読本を発刊し、平成6、7年度には、副読本の効果的な活用を探るための授業研究にも取り組んできた。しかし、副読本の学習への活用方法についてはあまり理解されずにいるのが実情である。

そこで、副読本により効果的な活用をはかるため、授業研究により明らかになった副読本の活用方法をまとめる。

平成10、11年度は、今まで副読本の活用がしにくいとされていた高学年に重点をおき、授業研究を試みてきた。その授業研究を通して、子供が生き生きと取り組める副読本の学習素材や学習を組み立てていく上で有効な資料の開発・検証を進めてきた。また、部分改訂作業にともない次期大改訂に向けての資料収集に努めてきた。さらに、授業研究、学習素材の開発、資料の収集・検証、部分改訂の各研究の成果を次期大改訂の基礎資料として蓄積するとともに、次期大改訂用プロット案としてまとめていくことで各研究内容をリンクさせることを試みた。

授業研究を通してみると、子供たちの問題意識をどのように引き出すかによって副読本の活用の仕方が違ってくることがわかってきた。特に高学年では子供たちの生活経験の外にある「日本の産業や歴史」、「世界とのつながり」などの学習への窓口として「身近な川崎ではどうなっているのだろうか。」という視点を持つことで有効に活用できる。こうした川崎(地域)発の学習において副読本は高学年でも大きな効果を発揮することがわかってきた。

副読本は3・4年生の社会科の学習を想定して編集されているため、学年が上がるに従い授業で活用されることが少なくなる。副読本活用という観点からだけでなく、現在求められている「生きる力」の育成という観点からも、従来の副読本の内容を子供たちにどう教えるかという学習から、副読本を一つの資料としてどう使いこなすかという学習能力を育てる学習へと教員の発想を転換していく必要がある。

次期大改訂に向けたプロット試案の作成については、現在の副読本の改善点や今後の学習に必要な要素をふまえ、環境、平和、ボランティアなどの今日的課題や川崎の歴史分野の充実、各区ごとの内容の充実を図り、高学年や中学校での活用をも視野に入れ、研究を進めていくことにした。これらの研究を通して、子供と子供の学習を支える教員が共に学習を楽しみ副読本を活用できるような授業研究を重ね、その方策を考えていきたい。

キーワード：社会科、副読本、郷土資料、川崎発の学習、学習能力の育成、プロット試案作成

目 次

I 主題設定の理由	178	2. 活用にあたって	184
1. 研究の意義	178	(1) 副読本の配布と活用の実際	184
2. 研究の方法	178	(2) 地域学習での活用	184
II 研究の内容	180	(3) 環境学習での活用	185
1. 検証授業から	180	3. 部分改訂について	186
(1) 「工業の盛んな地域をたずねて」	180	4. プロット試案について	187
(2) 「15年も続いた戦争」	181	III 研究の成果と今後の課題	190
(3) 「くらしを支える通信」	181	指導助言者・執筆委員	190
(4) 「くらしのうつりかわり」	183		

¹川崎市立犬蔵小学校教諭(研修員)

²川崎市立向丘小学校教諭(平成11年度研修員)

³川崎市立久末小学校教諭(平成10年度研修員)

⁴川崎市総合教育センター研修指導主事

I 主題設定の理由

1. 研究の意義

(1) 今後の副読本のあり方

現行の副読本は平成3, 4年度に改訂準備に入り, 平成5年度に全面改訂されている。平成6年度には写真, 資料などの部分改訂に加えて, 「教室で使える副読本」をめざし, 教員向けの学習指導資料を発刊した。5, 6年度では副読本の有効的な活用の仕方を授業研究を通して研究してきた。7, 8年次日にあたる本研究では現行の副読本の部分改訂と授業研究を引き継ぐとともに, 次期大改訂に向けてのデータや資料の収集をしていくことにした。川崎市では学習資料としてだけでなく, 市民読本としての性格も期待しながら, 昭和30年より発刊し続け, 今年で44年目を迎えた。

地域とのかかわりが薄い, 身近な人との出会いが少なくという子供の実態が, クローズアップされている今日, 地域とのかかわり, 身近な人との出会いの機会を重要視する動きもみられるようになってきた。地域とのかかわり, 地域を学ぶということは, 地域に愛着を持ち, 地域の一員として, 地域社会に参加していくことであり, 家庭や学校にはない新たなふれあいが生まれてくる場でもある。このような地域とのかかわりや地域学習の重要性を考える上で副読本は大きな役割を担っているといえるであろう。

地域学習を中心にすえた授業研究にあたっては,

- ・地域に根ざし, 地域の素材や地域の人々と出会える教材の開発
- ・地域と一体になった学習活動の工夫
- ・地域の切実な日常問題を取り上げ, その問題解決過程を重視した展開

という3つの視点を中心に進めた。

また, 社会科学学習に副読本を活用していくためには, 従来の副読本の内容を子供にどのように教えるかという学習から, 副読本を一つの資料として使いこなす学習能力を育てる学習へと教員の発想を転換していく必要がある。そのような学習を教員が展開していく場合に, 副読本にある文章や資料がどのように活用されるか, また, どのような資料が必要なのかを授業研究を通して検証してきた。

そして, そのデータや資料の収集については部分改訂に必要なものとともに, 川崎市内の日々の開発によって姿を変えていく地域を取材し, 調査した。それらを通し次期大改訂及び社会科データベースのための資料収集をした。

これらの研究成果を次期大改訂に向けたプロット試案に集約し, 研究を進めることにした。

以上のことから, 副読本のあり方を, 子供たちの地域学習の案内役と考え, 子供たちが「地域を学び」「地域で学ぶ」ことにより, 「地域に生きる力」や「地域から思考を広げる力」を主体的に身につけられるような副読本をめざしてきた。こうした川崎(地域)発の学習において副読本は, 高学年の学習でも大きな効果を発揮することが期待できる。さらに本研究を進めていきたいと考えた。

(2) 主題設定までの経緯

副読本は, 昭和30年の発行以来, 地域社会の変貌や社会情勢の変化に対応して改訂を重ね, 平成5年度には6度目の大改訂となった。現行の副読本の統計資料や写真などをより新しい物に改訂しながら, 子供が活用しやすい副読本をつくり続けてきた。

44年間の取り組みに基づいて, 副読本をより広く, より効果的に学習の中に活用していくための課題は以下の通りである。

- ①「副読本を学習する」のではなく「副読本で学習する」という意識をもち, 子供たちが問題を解決するための資料としてどのように位置づけられるのかを明らかにする必要がある。
- ②中学年だけでなく, 高学年においても社会科の内容を損ねることなく, 地域資料を活用できるようにしていくための方法を明らかにする必要がある。
- ③授業研究を通して, 教員だけでなく, 子供自身が興味や関心をもち, 自ら副読本を活用できるような方法を検証し, 普及させる必要がある。
- ④次期大改訂に必要な資料や, 写真及び内容を明らかにし, 基礎資料を蓄積するとともに次期大改訂プロット案としてまとめておく必要がある。

上記のような課題を解決し, 副読本のより効果的な活用を促進するために, 「郷土資料の作成と活用に関する研究」という研究主題を設定し, 「一副読本「かわさき」を活用した授業研究を通して」を副題として主題にせまるようにした。

2. 研究の方法

(1) 研究のねらい

- ①授業研究を通して, 副読本の活用の仕方を検証する
- ②授業の中から子供たちが必要とする資料を検証し, 次期大改訂に向けてデータを収集する。
- ③副読本の内容を見直し, 統計数値の更新や写真資料の一部差し替えを行うことで, より新しくて分かりやすい副読本を提供する。
- ④授業研究や活用事例研究などの研究をもとに, 副読本のプロット試案を作成し, 次期大改訂の資料を蓄積する。

(2) 研究の計画

○平成10年度		
	【実践・研究】	【部分改訂】
4月	・研究方針，研究計画	・改訂方針，計画
5月	・執筆者会議発足	・改訂箇所一覧表作成
6月	・活用事例の提案と検討	・改訂箇所分担
7月	・プロット案作成方針検討	
8月		・改訂箇所取材
9月	・第1回授業指導案検討	・取材，検討
10月	・第1回検証授業 5年「工業の盛んな地域をたずねて」 (河原町小 滝口太志教諭)	
11月	・第2回授業指導案検討	・改訂写真検討
12月	・第2回検証授業 6年「15年も続いた戦争」 (王禅寺小 小松典子教諭)	
1月	・プロット試案作成	・部分改訂箇所検討
2月	・プロット試案検討	・部分改訂箇所脱稿
3月	・研究のまとめ	
○平成11年度		
	【実践・研究】	【部分改訂】
4月	・研究方針，研究計画	・改訂方針，計画
5月	・執筆者会議発足	・改訂箇所一覧表作成
6月	・活用事例の提案と検討	・改訂箇所分担
7月	・プロット試案検討	
8月		・改訂箇所取材
9月	・プロット試案検討	・部分改訂箇所検討
10月	・第1回授業指導案検討	・部分改訂箇所検討
11月	・第1回検証授業 5年「くらしを支える通信」 (今井小 潮 龍馬教諭)	
12月	・第2回授業指導案検討	・改訂写真検討
1月	・第2回検証授業 3年「くらしのうつりわり」 (生田小 人見深雪教諭)	・部分改訂箇所脱稿
2月	・プロット案作成	
3月	・研究のまとめ	

(3) 研究内容と研究全体構想

①研究内容

これまで郷土資料研究会議が積み上げてきた授業研究を中心にすえ，副読本「かわさき」活用法を検討していくことにした。

年間2回，計4回の検証授業については，以下の視点から研究し，検証を進めて行くことにした。

- ・社会科本来のねらいに基づき，副読本の有効的な活用方法の検証ができるような学習を組み立てる。
- ・高学年においても「地域を学ぶ，地域で学ぶ」ことができるよう川崎（地域）発の単元を構成する。
- ・子供たちが必要感をもち，自ら資料の一部として副読本を開くような学習を展開する。
- ・副読本の資料だけでなく副読本に付け加えたい資料も学習に活用することで，次期大改訂の資料とする。

副読本の活用については，これまで“教員が副読本を社会科学習にどのように活用するか”という視点からアプローチをしてきた。本研究ではさらに，“子供自身が必要感や興味を抱いて副読本を開くには”という視点から副読本の活用法を検証することにした。つまり，従来副読本の内容を子供にどう教えるかという学習から，副読本を一つの資料として使いこなす学習能力を育てる学習（副読本でどう学ぶか・考えるか）へと発想の転換を図って臨むことにした。

●活用法についての考え方

「副読本を学ぶ」⇒「副読本でどう学ぶか，どう考えるか」

●副読本で育成する能力

- ①副読本を資料（集）として使いこなす学習能力
- ②地域に生きる力・地域から思考を広げる力

●教材開発と単元構想

- ①川崎（地域）発の学習・単元構想
- ②「地域で学び・地域を学ぶ」学習

②研究全体構想

大改訂から8年目を迎える。副読本をさらに子供たちの学習に役立ち，市民読本としても価値あるものにしていくためには，これまでの研究成果を生かした次期大改訂に向けたプロット試案を組み立て，検討を重ねていくことが重要となる。そこで，本研究では，プロット試案作成を中心にすえ，これまでの検証授業，部分改訂，資料収集などの各研究をリンクさせることで，次期大改訂に向けた基礎研究という方向性を持たせるような研究の全体構想を考えた。

II 研究の内容

1. 検証授業から

(1) 第5学年「工業の盛んな地域をたずねて」

—河原町小学校 滝口 太志 教諭の実践—

(平成10年10月22日 実施)

○授業の視点

- ・副読本「かわさき」は、「川崎（地域）発の学習」を考えたときに、5年生の工業単元として耐えうる価値があるか。
- ・「川崎（地域）発の学習」により獲得した川崎の工業の特色は、日本全体の工業の特色をとらえるための見方として機能したか。
- ・副読本の資料や文章は川崎の工業の特色をとらえるために、どのように活用されたか。

○主な流れと児童の反応

川崎の工業の様子をまとめよう。

- ・土地が高くなっていくほど工場数が少なくなっている。(P94, 95)
- ・P6の写真を見てタンクがたくさんある事が分かった。
- ・P20の写真と文章から、原油がシーバースを使ってタンクに運ばれ、タンクに運ばれた原油は工場ですべて石油製品につくりかえられることが分かった。

石油製品の他にどんな物をつくっているのでしょうか。

- ・P96のグラフと文章から、一番多いのは電気機械で、その他にコンピューター関係の工場や超L S Iなどもつくっていることが分かった。
- ・P94～P97を読んで研究開発に力を入れていることが分かった。
- ・埋め立て地になぜ工場が集まるのかを調べた。P16～P27を見ると輸出や輸入のために便利だということが分かる。ただ、重いものを船で運ぶのなら、超L S Iのような軽い製品はどうするのだろうか。
- ・P18～P19を見ると、川崎港には、外国から原油や石油製品、木材などのたくさんの品物が運ばれてくることが分かる。また川崎港からは石油製品や自動車などの製品が運ばれ、外国とつながりがあることが分かった。

南武線沿いの工場について調べた人はどうですか。

- ・P46～P47を見ると南武線沿いには、研究開発の工場が多いことが分かる。駅に近く働く人が出勤しやすいし、製品も船で運ばずに済む。

川崎の工場の特色は何だろう。

- ・小さい工場や大きい工場がたくさんある。
- ・電気製品を多くつくっている。
- ・埋め立て地がある。
- ・南武線沿いにはコンピュータ開発の工場がある。
- ・研究開発に力を入れている。
- ・低い土地に工場が多い。
- ・かなり空気が悪い。

川崎以外の地域で工業の盛んなところはあるのでしょうか。

- ・あると思う。
- ・分からない

川崎と同じような特色が日本全国にあるかという点を調べていけばいいと思う。

次時の学習問題

日本全国の工業の様子を調べよう。

○考察

- ・もともと5・6年に対応せずに作られている「かわさき」を5年生であえて利用することによってどのように児童が反応するか、という点では、土地・交通・輸送などのことが調べた資料の中にたくさん含まれていた。ただ、その内容をどのように絡ませていくかが問題である。そのための資料として、他の工業が盛んな地域の資料も必要になってくる。(例：工場の種類と数・生産額など)
- ・今回の検証で、副読本「かわさき」を活用し、工業の特色から始まり、日本の工業の特色へと広がっていくことが可能であることが分かってきた。地域発の学習を考えた場合、5年生の工業単元の学習でも十分に耐えうる価値がある。ただ、川崎に偏らず、日本の工業全体へと視野を広げていくためには、その他の資料もともに活用していくことが望ましい。

(2) 第6学年「15年も続いた戦争」

—王禅寺小学校 小松 典子 教諭の実践—
(平成10年12月4日 実施)

○授業の視点

- 川崎空襲の時に、自分たちの町(王禅寺)はどうだったのか、という状況を調べるのに、資料がどのように活用されたか。
- 副読本「かわさき」を活用し、自分たちの地域の戦争から太平洋戦争全体へとどのように広げていくのか。
- 川崎空襲の被災地域が工場地域と重なることや、空襲が終戦間近にあったことから、太平洋戦争の一つの歴史的事実をつかむための資料となりえたか。

○主な流れと児童の反応

川崎空襲の写真を見て気がついたことを話し合おう。

川崎空襲の拡大写真とP.112～P.113の資料を見て

- 工場の集まっているところをねらってアメリカ人が爆弾を落とした。
- 「かわさき」の年表の裏の地図で同じ所を比べると、六郷橋、丸子橋辺りには工場がたくさん見える。写真を見ると後ろの方に煙突がたくさん見えるので川崎区当たりの写真だと思う。
- 空襲は中原、幸、川崎区辺りだ。
- 京浜工業地帯は重化学工業が多いから攻撃された。
- 海に近いところは工場が集まっているからだと思う。
- 工場の集まりやすい所は5年で学習した。空襲があったところを地図で見ると、港(貿易しやすいところ)に集中している。
- P.113の死んだ人の数とP.117の「川崎の人口」の1943年の数が合わない。
- 写真には全く人がいない。
- 人がいないのは爆弾を受けないところへ避難したのではないか。

麻生区や多摩区では空襲はあったのだろうか。

- 大島小の子供たちが学童疎開にきてるから空襲はなかった。
- おじいちゃんの話では、昔この辺りは山ばかりであまり被害はなかったと言っていた。
- P.113に爆撃は工場や鉄道と書いてある。多摩区や麻生区は畑ばかりで攻撃しても、無駄ではないだろうか。
- 副読本「王禅寺」P.84にこの辺にもB29が来た

と書いてある。

- 王禅寺の開発は最近なので、昔は山だったので攻撃を受けなかったと思う。
 - 副読本「王禅寺」P.84に防空壕のことが書いてあるので、空襲はあったと思う。
- 次時の学習問題

防空壕はなぜ作られたのか?とゆうことを含めて、次は王禅寺に空襲があったかどうかについて調べよう。

○考察

- 川崎空襲の拡大写真から導入したが、子供たちはすぐに副読本「かわさき」に目を向けていた。写真の場所の特定から被災分布の方に話が進んでいった。また、資料をうまく組み合わせ使っていた子供が多く、特に川崎の人口の移り変わりの資料と組み合わせ使っていた子供の驚きが大きかった。しかも、自分の学校の副読本も合わせて利用し、子供の思考が広がっていった。
- 川崎(地域)発の学習を展開することにより、歴史についてよく知っている子供も、そうでない子供も同じ土俵上で意見を交換することができる。しかも、地域のことをよく知っている子供が、お年寄りに聞いた話や自分が見たり聞いたりして知っていることなどをみんなに知らせることにより、教科書や副読本、参考書などでは得られない情報が学習の中で生かされてくる。今回の場合は、「王禅寺にも空襲があったのか?」という疑問に対して、「おじいさんに聞いたらなかった。」という声が出て、「でも副読本には……」というあたりで次時の学習問題につながっている。
- 今回の検証授業は「川崎全体から王禅寺へ」と事例が狭くなってきている。今後の展開としては「日本全国ではどうだろうか?」というように広がっていかなければならない。ただ、この川崎空襲の学習をしたことにより、戦争をより身近に感じ、そこで学んだ戦争に対しての見方考え方は必ず次の学習に生かされてくるのではないだろうか。

(3) 第5学年「くらしを支える通信」

～わたしたちの街のコミュニティ放送局～

—今井小学校 潮 龍馬 教諭の実践—
(平成11年11月25日実施)

○授業の視点

- 「コミュニティ放送局が地域にどういった放送を行い、情報発信しているか」という問いに対してどのような資料が必要か。

- ・地域の紹介番組を作るときに、どのページを使い取材するテーマを決めることができるか。

○主な流れと児童の反応

「かわさき」や「いまい」を使って、グループごとに地域のイメージカードを書こう。

川崎市紹介の録音グループ

- ・パラステゴドンゾウ ・子母口貝塚
- ・白山古墳 ・三角縁神獣鏡・川崎宿
- ・75年前に市になる ・最初の小学校は13校
- ・市になったときは5万人

中原区紹介の録音グループ

- ・中原警察署 ・中原消防署 ・中原区役所
- ・法政通り ・サライ通り ・武蔵小杉駅
- ・ブレーメン通り ・二ヶ領用水
- ・渋川 ・等々力緑地 ・パンジー

等々力緑地紹介のVTRグループ

- ・等々力球場 ・等々力陸上競技場 ・釣り堀
- ・大きな公園 ・たくさんの人が来るところ
- ・市民ミュージアム ・とどろきアリーナ

今井小紹介のVTRグループ

- ・国際交流 ・特別教室がたくさんある
- ・帰国児童が多い ・いろいろな行事がある
- ・緑がたくさんある

今井紹介のVTRグループ

- ・商店街やスーパーが多い ・コンビニもたくさんある
- ・人口が多いから店も増えてきた
- ・たくさん種類の店があって便利

イメージカードをもとに話し合い、番組の企画書を書こう。

川崎市紹介の録音グループ

- 題名「川崎の歴史 今と昔をくらべて」
- ・川崎の今と昔を比べたことを見つけたい
 - ・ふしぎ話や今では無くなったものの紹介

中原区紹介の録音グループ

- 題名「中原・通り大そうさ線」
- ・中原区にあるいくつかの商店街を紹介

- ・流行っているものやよく売れているものなど

等々力緑地紹介のVTRグループ

- 題名「等々力たんけん隊」
- ・たくさんある施設紹介とそこに来ている人たちへのインタビュー
 - ・おすすめスポットなど

今井小紹介のVTRグループ

- 題名「今井小 世界で一つの宝物」
- ・先生や帰国児童、特別教室やクラブを紹介して今井小のことを知らせる

今井紹介のVTRグループ

- 題名「今井の店紹介」
- 先生紹介、帰国児童紹介、特別教室紹介

次時の学習問題

企画書をもとに番組作りを始めよう。

○考察

- ・「かわさき」を活用したグループは、市や区の紹介するグループがほとんどであった。取材するヒントとなる言葉からイメージを広げ、取材したいことを決めていったようだ。市や区について自分たちが知らなかったことに興味を持ち、調べて紹介しようという意欲が見えた。
- ・「コミュニティ放送局」についてP108の文から地域の人たちへの情報発信が主であるという働きが分かり、番組作りの際の意識が高まった。
- ・「K-City (FMかわさき)」については、見学や独自の資料による学習を通してその役割と活動について理解した。市民向けの放送局なので今後の改訂では積極的に取り上げたい。
- ・自分の紹介したい地域決めやその後の番組作りの計画を立てる際に「かわさき」と本校の地域読本「いまい」を並行活用した。子供の知りたいことに応じて資料を選んでいく大切さ、情報選択の必要性について強く感じた。

(4) 第3学年「くらしのうつりかわり」

～わたしたち、ぼくたち、

まちの昔さがしたんけんたい～

—生田小学校 人見 深雪 教諭の実践—

(平成12年1月18日実施)

○授業の視点

昔の台所や土間のモノクロの絵に自分で色をつけることで、今と昔のくらしの違いに気づき、昔のイメージをふくらましたり、昔のくらしに興味を持つようにする。

- ・「昔の台所や土間の様子」を表した白黒の絵のわかった部分に色をつける時、どの部分が子供にとってわかりやすいのか。また、わかりにくいものか。
- ・色を絵にぬっているうちに、どんなものに疑問を子どもたちが持つのか。
- ・色を塗る作業をしながら、昔のくらしに対してどのようなイメージを子供たちは持つのだろうか。

○主な流れと児童の反応

昔の台所・土間の様子の絵のわかるところに色をつける。

「かわさき」P121「台所や土間のようす」の色を塗いたワークシート

- ・木でできているものや家の壁に色を塗るの子が多い。
- ・家の壁は石等でできていると考え、灰色に塗るの子が多い。
- ・色塗りが進むうちに、画面のほとんどが茶色か灰色になっていった。

家が古かったり、壁に穴が開いていたりするので貧しいくらしをしていたというイメージを強くもつ。

- ・昔のものは自然のものを材料に使っている。
- ・なたを包丁だと思っている。
- ・流しの部分がわからずに塗れない。

ていねいに一つ一つのものを見て、理由を余白のスペースに書いている。しかし、火をおおぐうちは暑さのため、なたは包丁だと思っている。

昔の土間や台所の色塗りの作業を通して、気がついたことやわからないことを発表する。

- ・つけもの石がある。
- ・おけがある。井戸から水をくんでくるのだと思う。
- ・(洗い場を指して)これがわからない。
- ・(洗い場を指して)たぶん食器とかを洗う所。形

が似ているし、下にバケツがある。

ここが流しだとしたら、水はどこからでてくるのかと悩み、こだわりを見せていた。

- ・かまがある。
- ・ニワトリを育てて卵を採っている。
- ・野菜が天井につるしてある。
- ・わらじを作っている。
- ・家が(今みたいに)鉄でできていない。
- ・壁には石や砂、竹や木が入っている。

かわさきの絵と自分の塗ったのを比べる。

- ・壁の下は竹だった。
- ・壁にかけてあるのは、ザルだか何だかはっきりしない。
- ・(洗い場を指して)やっぱり流しであっている。包丁もある。
- ・漬物樽の隣りは水を入れるのに使う。

次時の学習問題

日本民家園を見学しよう。

○考察

- ・絵に色をつけることで、昔の「色」のイメージや道具に使われているものがほとんど自然のものから作られていることをつかむことができた。
- ・子供たちは、自分の経験から塗りはじめ、自分のイメージをふくらませていった。道具以外にも目が向けられていく資料で、子供のイメージを幅広く広げるための手立てとしても使える。
- ・一方、「何から塗るか」といった焦点化した発問で進めれば、子供の問題となるものがはっきりしてきたと考える。
- ・「わかったことに色を理由づけして塗る。」では、気づいたことの羅列に陥ってしまった。途中、「流しの水はどうなっているのか。」という声が子供から出た。このように反対に「わからない所はどこか」という視点で話をした方が良かった。子供たちは、わかったことから興味やイメージをふくらますことにより、わからないことから昔をとらえて行こうとしていた。
- ・この授業の後、この絵をじっくりと使うことで、その絵の下に書かれている説明文をすんなりと理解することができた。
- ・子供にとってわからなかった壁の色や道具は、民家園や学校の郷土資料室の見学のポイントになってくる。

2. 活用にあたって

(1) 副読本の配付と活用の実際

①配付にあたって

副読本は、川崎市についていろいろ知りたいという子供たちの意欲に応えるため、市内めぐりをしても見られない航空写真や、社会事象に対する見方や考え方を示唆する資料が豊富に掲載されている。そこで、配付する際には、副読本との出会いが、川崎市の一員である子供たちの市民としての自覚を意識させる第一歩となるようにしたい。そして、子供たちに自分たちを育ててくれている川崎市を愛する気持ちが芽生えるようにしていきたい。

- ・「この本は、教室にいたままで川崎市をたんけんすることができる本だよ」
- ・「表紙を広げて見てみよう」⇒航空写真を見ながら、川崎市の様子で気がついたことや行ったことのある場所などについて話し合う。
- ・「中には何が書いてあるのかな」⇒行ってみたい場所や知りたいことなどについても話し合う。
- ・「川崎市ってリュウミたいな形だね」
- ・「区のマークもあったね」
- ・「みんなの住んでいる所はどのページに書いてあるのかな」⇒自分たちの住む区の写真と絵地図のページを探し、他区と比べて気づいたことなどについて話し合う。
- ・「家でもう一回読んでみよう。お母さんやお父さんにも見せてあげよう」⇒6年生になっても、大人になっても利用できる本であること、休日に家族と川崎のいろいろな所に出かける時のガイドブックにもなることを知らせたい。

②活用の実際

～小田小学校の実践事例～

○単元名「わたしたちの住む川崎市」

～百万都市に小学校はいくつある？～

巻末の川崎市地図と川崎市内の多くの小学校の副読本を見て、行ってみたい学校や調べてみたい場所を見つけよう。(1時間)

- ・自分たちの学校の位置 ・行ってみたい場所と理由

行ってみたい学校まで行く行き方を川崎市地図などで調べよう。(1時間)

- ・乗降駅名 ・利用駅名 ・行ってみたい学校の位置

行ってみたい学校のある場所の様子を土地利用図や各校の副読本で調べて、どんな特徴があるか考えよう。(1時間)

- ・各区の様子・各校の学区の様子

川崎市についてもっとたくさんの場所を調べよう。副読本から見つけて、もっと詳しく調べる方法を考えよう。(2時間)

- ・地図上の位置と写真や文章から調べる
- ・資料の集め方の話し合い

調べた場所を紹介しよう。(1時間)

- ・地図上の位置や写真、集めた資料などを実物投影機でテレビに映したりして紹介する。
- ・調べた地域の様子や特徴をまとめ、全部を比べて川崎市全体の特色について理解する。

③活用のポイント

- ・副読本の写真・グラフ・地図などの活用
写真などを実物投影機でテレビに映したり、カラーコピーしたものを地図や模造紙に貼ったりして活用する。これらによって、自分たちで調べたことを地図やグラフ、絵や写真で表していくという、社会科学学習で活かせる表現方法を獲得することができる。副読本の資料から、子供の発想を大切にまとめてもらえるように支援したい。
- ・その他の資料の活用
実際に話を聞いたり、パンフレットを集めたりする活動や、市民便利帳や各校の副読本などの資料も活かして、多様な調べ方をさせたい。調べる中で、友達や父母や地域の人々との触れ合い、必要な資料の収集と選択などの、調べる楽しさも経験させるようにしたい。多様な調べ方はもちろん、その子なりの表現方法も認めたい。
- ・初めての社会科学学習のために
社会事象への見方や考え方を育てるために、地域に出て具体的に調べる学習と、副読本の写真などの資料を活用して調べる学習を関連させて取り入れるようにする。具体的な体験活動だけでなく、間接的な資料に対する観察力、活用力をみがき、問題を解決する力を養いたい。

(2) 地域学習での活用

①ねらい

- ・身の回りの地域を学習してきたが、ここでは空間的な広がりをとらえていくことが必要となる。自分たちが生活している地域と、土地利用、建物の分布、交通等の様子において類似している点、違っている点に目を向けていく過程で、「川崎市」の様子を点

から面としてとらえられるようにする。

- ・市内の他の地域の様子を調べる過程で、それぞれの地域の人々が環境（土地利用、交通等）を上手に活用しながら生活していることに気付く。

②活用の実際

～夢見ヶ崎小学校の実践事例～

○小単元「わたしたちの川崎市」

○小単元目標

川崎市の地形や土地利用の様子、建物の分布、交通の様子など調べ、市の人々の生活は交通と深い関係があることや、場所によって土地利用の様子や人々の生活には違いがあることをわかってもらう。

○主な学習の流れ

<前時までの学習>

わたしたちの町～夢見ヶ崎～

(学区探検のまとめ)

夢見ヶ崎のまわりのことを、調べる。

副読本かわさきで、夢見ヶ崎小学校近隣、幸区の様子を調べる。

<本単元の学習>

川崎市の中で、夢見ヶ崎小学校から遠くの学校の周りの様子が、夢見ヶ崎小学校の周りと違うことに気付く。

- ・川崎市の掛地図で、岡上の場所を知る。
- ・岡上への行き方を調べる。
- ・岡上小学校の副読本、副読本かわさき（P74～75）を活用して調べる。
- ・飛び地の由来を知る。
- ・営農団地で作られているものを、白地図に色分けする。

東高根森林公園のある高津区は、幸区とどのような違いがあるのだろうか？

- ・副読本かわさき（P52～57、P87）を活用して、調べる。
- ・高津区役所のまわりの絵地図と自分たちが作っている絵地図とをくらべ、駅やデパートの存在、商店の多さに気付く。

<市内めぐり>

市内めぐりで発見したこと、考えたこと、さらに調べたいことを、まとめる。

- ・岡上の地域、東高根森林公園の周りの地域と夢見ヶ崎の地域の土地利用等の違いについて、五感を使って発見したこと、考えたこと、さらに調べたいことをまとめ、話し合う。

市内の他の場所について、調べてまとめたことをもとに、発表会を開く。

- ・副読本かわさきや他の学校の副読本等を活用して市内めぐりでは行けなかった地域の様子を、調べる。

○地図上の位置

○行き方

○その地域の土地利用

③活用のポイント

=初めて社会科を学習する時期の副読本かわさきの活用の仕方=

- ・身近な地域を学ぶ3年生初期の段階から、副読本かわさきや各学校の副読本を、3年生の資料コーナーに集めて、子供たちが自由に利用できるようにした。学区探検の学習の時、夢見ヶ崎動物公園（P74）を調べたり、絵地図を参考にすることができた。
- ・本単元を学習するにあたって、子供の実態から川崎市を点から面（岡上地区～高津区～川崎市）へ広げられる学習の流れを考え、副読本かわさきに載っている岡上地区の土地利用図を白地図にして活用したり、関係のある写真や絵地図の読み取りをしたりしていくようにした。点から面に視点が広がる過程で、川崎市の地図（巻末）、市内の土地の高さと断面図（p12）、区ごとの人口（p14）等の資料を、子供たちの必要性に応じて活用していくことができた。
- ・「市内めぐり」という五感を使って調べる活動だけでなく、副読本かわさきの豊富な資料を使って資料の活用能力や観察力を養い、問題を解決する力を育てていくことが大切である。この学習経験が、4年生以降の社会科学習においても、生きてはたらく力になるものとする。

(3) 環境学習での活用

①ねらい

- ・地球規模でとらえる森林破壊、砂漠化や酸性雨など環境問題をまず川崎市内の問題から始めてとらえていきたい。
- ・多摩丘陵の開発、工場の進出、道路交通網の拡大など川崎市の人口増加や産業の発展の陰には、環境破壊や公害問題があったことに関心を持てるようにしたい。そして、環境の現状や影響をとらえ、行政や

企業の取り組みを調べるとともに、自分たちが取り組めることについても考えていきたい。

②活用の実際

～子母口小学校の実践事例～

○小単元名「地球の環境を考える」

～川崎の緑をさがそう～

○小単元目標

地球上で起こっている環境問題について調べ、その原因や影響などをとらえようとする。

地球環境の問題が自分たちの生活に与える影響を考えるとともに、環境を守る努力について調べ、自分なりにできることを考えようとする。

○主な学習の流れ

副読本「かわさき」から川崎の緑を探す。

- ・副読本の緑の写真を探す。
(表紙の河川敷、多摩丘陵、工場敷地のグリーンベルト、緑地や田畑など)
- ・写真以外の部分からも探す。
(P98の田畑の広がり、P100～P101の田や畑の多い所、川崎市地図など)
- ・緑の部分が何か、また、何に利用されているかを考える。

緑の部分についての利用状況や移り変わりから、川崎市内の環境問題や、行政や企業の取り組みについて調べる。

- ・副読本やその他の資料をもとに調べる。
P80～81 緑の中の福祉施設
P116～117 市の人口のうつりかわり
P176～177 よりよい環境づくり
P180～181 21世紀に目を向けて
など
- ・P176～177 「よりよい環境づくり」をもとに、公害監視センター、空気や水の自動測定器の設置、環境基本条例、環境週間など、市を中心とした国、県の取り組みについて調べる。

地球規模で起こっている環境問題について調べ、自分たちの生活に与える影響について考える。

- ・酸性雨、森林破壊(熱帯林の減少)、砂漠化などの問題について考える。

地球環境を守る努力について調べる。

- ・国際的な取り組みについて調べる。

地球環境の問題について、自分なりにできることをレポートなどにまとめる。

- ・「21世紀に目を向けて」(P180～181)をヒントに、自分たち一人一人にできることは何かを考えてまとめる。

③活用のポイント

- ・副読本「かわさき」は主な編集対象が中学年なので、3,4年生の使用頻度が高い。しかし、5年生の産業学習や環境学習の単元においても、まず身近な川崎に目を向け、関心や意欲を高めて、全国や地球全体へ広げていくという方法が効果的に活用できると考えられる。
- ・今回の単元の場合、地球の環境問題を身近な川崎へ戻すという方法など、いろいろな方法(公害学習の復習から地球規模へ広げるなど)が考えられる。身近なものに引き寄せる視点づくりとしての副読本の活用も考えられる。

3. 部分改訂について

町は生きている。1993年に大改訂が行われてから、川崎駅周辺、溝ノ口駅周辺と川崎も刻々と変化している。また、より子どもが活用しやすいような資料を掲載することが必要である。そこで、以下のような視点で毎年見直しを行い、部分改訂を重ねて行くことにした。

部分改訂の視点

- ・川崎の明るいイメージが伝わる写真にする。
- ・最新のデータを載せていく。
- ・再開発などで変貌著しい地域の写真を変える。

また、8・9年度の研究を引き継ぎ、川崎の今を残すという視点から、変貌著しい箇所をリストアップし、定点観測されたものの中から部分改訂にふさわしいものを取り上げ、資料を差し替えてきた。引き続き変貌の著しい箇所を定点観測することにより、将来的にはデータベース化していくことで次期大改訂の資料として活用できるだけでなく、川崎市の大きな共通財産にもなる。

＝平成10・11年度に改訂した箇所＝

No	ページ	キャプション
1	7	アクアライン
2	14	百万人をこえる人びと
3	28	首都高速道路
4	31	川崎市役所のまわりの絵地図
5	41	幸区役所のまわりの絵地図
6	45	中原区役所のまわりの絵地図
7	53	高津区役所のまわりの絵地図
8	55	買い物客が集まる商店街
9	59	多摩区役所のまわりの絵地図
10	62	大学のある町
11	64	宮前区役所のまわりのようす
12	65	宮前区役所のまわりの絵地図
13	70	麻生区役所のまわりのようす
14	72	開発された百合丘のまわり
15	74	空から見た岡上
16	75	岡上の営農団地
17	76	マイコンシティの位置
18	79	尻手黒川道路
19	88	岡本太郎美術館
20	98	田畑の広さと農家数のうつりかわり
21	108	地域に広がるケーブルテレビ
22	137	川崎市内の主な道路
23	147	円筒分水
24	148	よみがえる二ヶ領用水
25	151	二ヶ領用水から水道水へ
26	156	かわる海岸線
27	169	地域の中のふれあい
28	170・1	世界の友だちとのふれあい
29	178・9	くらしをゆたかにする施設
30	巻末	川崎の年表

＝部分改訂では＝

- ・ 明るいイメージを大切にし、人との関わりが見える。
- ・ 鮮明な航空写真
- ・ 最新情報を掲載するため5年ごとのデータを載せる。
- ・ 再開発などの変貌激しい地域を差し替え、副読本の中に「開発中」などと標記をする。
- ・ 名称の変更、写真の差し替えによる本文の改訂

＝8・9年度の定点観測を生かして＝

平成8・9年度の研究で変貌の著しい川崎の今を「川崎市都市開発方針」をもとに候補地を選定し、写真として残してきた。今年度は、その成果を部分改訂に生かしてきた。

a) 航空写真の差し替え

- ・ 各区の区役所のまわり
- ・ 開発された百合丘のまわり
- ・ 空から見た岡上

b) 絵地図・地図の改訂

- ・ 各区の絵地図
- ・ マイコンシティの位置
- ・ 尻手黒川道路

c) その他の写真の差し替え

- ・ 岡本太郎記念館
- ・ 小学校をおとずれたボルチモア市民
- ・ 国際交流センター

今年度は、平成8・9年度の定点観測を部分改訂という形で生かしてきた。今後は、次期大改訂を控え、さらに定点観測の場所を検討し、引き続き写真として残していく必要がある。さらに将来的には、「川崎の今」を撮影した写真のデータベース化を促進していく方向で取り組んでいければと考えている。

4. プロット試案作成について

(1) 次期大改訂へ向けて

現在使用している副読本は、最新の川崎の姿を伝えることをねらいとして、平成5年度に全面改訂されよりビジュアルな編集と内容に変わった。

さらに、平成6年度には、教師用「学習指導資料」が発行された。

平成8年度には各学校で副読本がどのように活用されているかアンケート調査を行った。回答が多かった内容を抜粋して掲載する。

副読本「かわさき」利用状況アンケート（抜粋）

- ◆ 3年生の「川崎市」の学習での活用方法は？
 - ・ 調べ学習の資料として
 - ・ 教科書の替わりとして
- ◆ 3年生の「川崎市」の学習以外で活用した単元は？
 - ・ 開発単元（二ヶ領用水、新田開発）
 - ・ くらしの移り変わり
- ◆ 活用しやすくするための改善点は？
 - ・ すぐに使えるワークシートを増やす。
 - ・ 学習への活用方法を具体的に例示する。

活用されている状況は3,4年生中心で、資料として使う場面では内容は豊富であるが、すぐに活用することが難しいということである。活用の難しさに関しては、副読本が子供たちの学習資料であると同時に、市民に川崎市の様子を知ってもらうための市民読本的な性格を合わせているからだと思われる。「副読本の豊富な資料を学習にぜひ活用したいのだが、どの場面で、どのよう

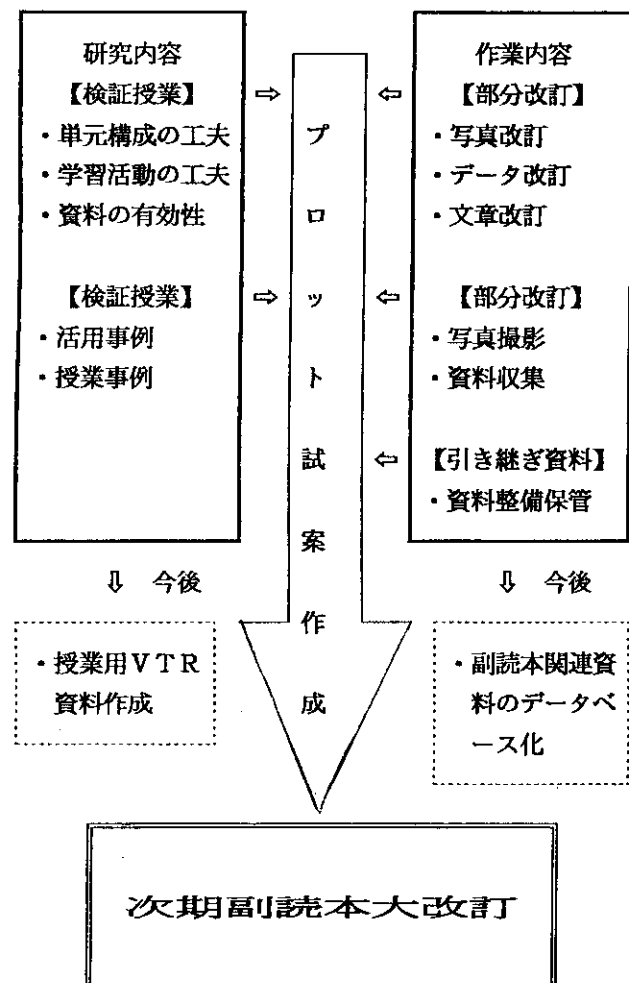
に活用したらいいのか…」という回答が多く寄せられた。また、高学年での活用がほとんど見られないのは、3,4年生の社会科学習での活用を考えて編集されていることに起因しているからである。そこで、

- ・副読本ならびに学習指導資料の活用法や学習との関連が、事例を通してわかる。
- ・子供自身が普段から興味をもって副読本を開くようになるための活用例を示す。
- ・教員のニーズに応じて関連項目が一覧できる。

という趣旨の「活用事例集」を平成9年度に発行した。

また、高学年での活用を目指して、産業学習や歴史学習、国際理解単元での学習場面で、「身近な地域（川崎市）から社会を見つめる」という視点で単元構成をして、副読本が有効に活用される場面があるのではないかと考え、検証授業を行った。これは、次期大改訂への布石ともなると考えた。

次期大改訂への流れ図



さらに、

- ・最新の川崎を伝えるための部分改訂
- ・検証授業を通して明らかになった子供の思考によって有効な資料収集

・変貌の激しい川崎市の「今」を残すための写真や各種の資料収集

を行ってきた。

以上のような取り組みをプロット試案にまとめ、次期大改訂に向けて研究を進めている。なお、全体の流れを前に図表で示した。

(2) 作成のねらい

現在の副読本は、以下のような特色をもって編集されている。

- ①3・4年生の地域学習に即し、多様な角度からわたしたちのまち川崎をとらえた構成となっている。
- ②対象を3,4年生に絞り込むことで、平易でわかりやすい記述になっている。
- ③川崎の特色をとらえたカラー写真を中心に紙面を構成することで視覚から興味を引き出し、文章記述で社会的意味付けを考えていけるように編集されている。
- ④昔のくらしの様子など、写真だけではイメージを膨らませることができない部分にイラストを用い、子供たちの思考を促すようにしている。
- ⑤社会科学習指導資料であるとともに、市民読本としての性格も合わせ持っている。

これらの特筆すべき副読本の特色に基づき、これまでの授業研究、活用事例集、資料収集などの研究成果を焦点化するとともに、基礎データを蓄積していきたいと考えている。

(3) 作成にあたって

プロット試案の作成にあたっては、研究の成果を生かし、以下のような方針で取り組むことにした。

- ①社会科学習資料であるとともに、市民読本としても広く活用されるものとする。
- ②従来の中学年中心の内容から、高学年や中学生にも活用される内容を盛り込み編集する。
- ③これからの教育課題にも対応できるよう、平和・人権・国際理解・環境・福祉・健康などの項目を加える。
- ④未来に向かって伸びる川崎の姿を明るいイメージでとらえることができるようにする。
- ⑤変貌の激しい川崎の姿をいち早く伝えらるとともに、今残しておかなければならない事象も大切にしている。
- ⑥全体構成を「地理」「産業」「歴史」「くらしと文化」「ふるさと川崎」「巻末資料」に分け、内容を整理していく。各編の改訂ポイントを以下に示す。

《地理》

各区の小項目の観点を次の5点に統一する。

- ・区役所のまわり
- ・交通（鉄道、バス、道路など）
- ・区の特徴
- ・町づくり
- ・その他（歴史、文化、レクリエーションなど）

《産業》

産業の特色だけでなく、川崎発の学習を想定した内容と資料で構成する。

- ・運輸、貿易の仕事は「工場の仕事」「農家の仕事」と関連して扱う。
- ・「通信の仕事」を充実させ、CATVの他にK-City、朝日プリンテックなども取り上げる。

《歴史》

従来の地理的分野に加えて、歴史的分野を充実させることで、川崎を空間的な広がりだけでなく時間的な経緯の中からとらえることができるようにする。

- ・時代ごとに見開きページで紙面を構成していく。

《くらしと文化》

中学年の内容から「家屋のうつりかわり」が削除されたが、市民読本という位置づけからも日本民家園は従来通り扱っていく。

《ふるさと川崎》

次期大改訂の目玉にしていきたい。今日的課題を全面的に押し出して構成していくとともに、「未来に向かって伸びる川崎」のイメージを明るいものにしていき、市民としての誇りが持てるような内容にする。

《巻末資料》

郷土川崎についての情報や統計資料などを巻末資料として掲載することでより資料性を高める。

プロット試案

大項目	中項目
1. 百万都市・川崎市 (川崎市の概要)	(1)空から見た川崎 (2)地図を見て (3)川崎市の交通 (4)川崎市の気候 (5)百万をこえる人々
2. 海に近い平地を たずねて	(1)海辺に集まる工場 (2)世界につながる川崎港 (3)生まれ変わる大工場の跡地 (4)川崎区をながめて

3. 多摩川ぞいの 平地をたずねて	(1)幸区をながめて (2)中原区をながめて
4. 平地と丘陵地を たずねて	(1)高津区をながめて (2)多摩区をながめて
5. 多摩丘陵をたずねて	(1)宮前区をながめて (2)麻生区をながめて
6. 川崎市の人々の仕事	(1)市の人々の仕事 (2)工場の仕事 (3)農家の仕事 (4)商店の仕事 (5)通信の仕事 (6)サービスの仕事
7. 川崎市の うつりかわり	・市民ミュージアムをたずねて ・大昔の川崎から昭和時代の川崎まで ※開発単元を歴史の流れの中で扱うか検討中 ・川崎市歴史探検マップ
8. 川崎市の人々のくらしの うつりかわり	(1)日本民家園をたずねて (2)ふえる人口と学校 (3)生活にうけつがれる行事や習慣
9. 平和なくらし	(1)川崎市平和館をたずねて (2)新たな地球平和をめざして
10. 住みよい環境	(1)公害をのりこえて (2)未来はわたしたちの手で
11. ふるさと川崎	(1)ふれあいをもとめて (2)ゆたかな町に (3)未来に向かって
12. 巻末資料	川崎の地名、施設、年表など

Ⅲ 研究の成果と今後の課題

1. 授業研究を通して

平成10・11年度と2年間で4回の検証授業を行った。副読本を子どもがどのように活用するか、どのような補助資料が必要かを中心に授業研究を進めてきた。その中で「川崎発の学習展開」の重要性も見えてきた。

第3学年「くらしのうつりかわり」では、副読本121ページにある挿絵を使い、昔の台所や土間を色塗りすることから始まった。色塗りをさせることにより、昔のイメージを「木と土」というようにとらえ、そこから様々な疑問が生まれ、昔の道具調べにつながる興味・関心を高めることができた。

第5学年「工業の盛んな地域をたずねて」では、川崎市の工業の特色を副読本のあらゆるページを使って調べて自分の考えや発表のもとになる資料を作成していた。そこで調べた内容や、分かったことが、日本の工業の特色を考えていく上で有効なことが検証された。ただ、副読本だけの資料では統計的な数値が足りないので、他の資料も活用した。そのあたりを改善していけば5年生の工業の単元で「川崎発の学習展開」が副読本により十分可能である。

第5学年「くらしを支える通信」では、今までわずか1ページと扱いが少なかった通信の分野での授業展開を試みた。108ページの「地域に広がるケーブルテレビ」を導入とし、K-City（かわさきFM放送局）や東急ケーブルテレビにまで取材の手を伸ばして学習を展開していった。まさにこれからの大改訂に備えて重要な項目であると考え、その学習で使われた資料などは次期大改訂に必要なようになってくるであろう。

第6学年「15年も続いた戦争」では、副読本112ページの写真から導入し、その場所を予想し特定していく中で、「麻生区や多摩区では空襲があったのだろうか？」という問題に発展していった。子どもたちは学習中に副読本の文章や関連する資料を探し出したり、自校の副読本やその他の資料を活用したりして、自分の発言の根拠としていた。この学習の中でポイントとなったのは副読本113ページの「空襲による被災地域」の資料である。この学習のあと「自分たちの地域にも空襲があったのだろうか？」というようにつながっていった。

どの授業においても「川崎発の学習」「補助資料の活かし方」という視点で取り組んだ。副読本を中心的資料にするか補助資料にするかは別として、副読本の資料を子どもがどのように活用するかが分かり、次期大改訂のプロット立て、有効な掲載資料を考える上で大きな成果を上げることができた。

2. プロット試案作成について

歴史分野の充実、川崎発の学習、平和・環境・福祉などの項目の追加、各学年ごとの重点単元の設定、郷土川崎についての情報や統計資料の巻末資料化など、現在の副読本のよさを活かしつつ活用の幅を広げる内容を考えてきた。

このような新たな観点から、副読本の内容を見直し、授業研究や部分改訂などの研究成果をプロット試案としてまとめ、次期大改訂の参考となるように取り組んできた。この試案をもとに、次期大改訂のプロット作成を柱に今後も『子どもたちが開きたくなるような』副読本の研究を進めていくことが重要である。

3. 今後の課題

- 部分改訂と「川崎の今を残す」取り組みを連携させ、定点撮影及び写真のデータベース化をはかっていくことが重要である。
- 副読本を活用した「川崎発の学習展開」を構想していくためには、今後、単元の構想やそのために必要な資料の検証及び、プロット案の検証が必要である。
- 部分改訂や授業研究を通して研究してきたことをもとに、教師や子ども自身がより興味を持って活用できるような副読本に、さらに市民読本としての性格を残しつつ魅力ある副読本になるように次期大改訂に向けてのプロット試案をさらに検討して行かなければならない。

[指導助言者]

小学校社会科教育研究会前会長 (川崎市立桜本小学校長)	菊地 恒雄
小学校社会科教育研究会会長 (川崎市立三田小学校長)	山本 利之
小学校社会科教育研究会副会長 (川崎市立宮前小学校長)	近藤 真市
小学校社会科教育研究会副会長 (川崎市立宮内小学校長)	卓開 豊
小学校社会科教育研究会副会長 (川崎市立犬蔵小学校教頭)	松田 幸夫
川崎市教育委員会指導主事	菊池 眞

[執筆委員]

川崎市立河原町小学校	滝口 太志
川崎市立子母口小学校	佐川 昌広
川崎市立夢見ヶ崎小学校	中山 敬史
川崎市立今井小学校	潮 龍馬
川崎市立生田小学校	人見 深雪
川崎市立王禅寺小学校	小松 典子